幸男君

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸男君

【Ｎコード】
Ｎ６８８８Ｏ

【作者名】
ＨＥＥＲＯ

【あらすじ】
理沙が何年かぶりに会った幼なじみは、他人にとても気を使う人になっていた。

（前書き）

＞i13574－210＜

電車出勤の里沙は駅へ向い歩いていた。
腕時計に目を遣り、まだ時間に余裕があることを確認していると、前方で金属のぶつかる音が鳴った。
鍵が落ちている。さらにその先では、視線を落として必死に何かを――十中八九その鍵だろうが――探す会社員の男性。キーホルダーの類が付いていないため、なかなか見つけられずにいるのだろう。里沙がすぐに鍵を見つけられたのは本当に偶然だった。
「これですか？」
里沙は鍵を拾い上げ、会社員の男性に手渡した。
「あっ、ありがとうございます。…あれ？」
男性は里沙の顔を見ると、小さく驚いたような声を発した。
「あの、もしかして、田山…里沙さん…？」
「えっ、あ、はい、そうですけど…。って、まさか幸男（さちお）…君？」
「うん…！　そっか、やっぱり田山さんだったんだ」
里沙は驚いた。
幸男は里沙の同級生で幼なじみだったのだが、小学四年生の時に彼が他県へ行ってしまい、それ以来会っていなかったのだ。
両親を事故で亡くし、親戚の家に住むことになったのが、幸男がここを離れた理由だと里沙は人づてに聞いていた。
（きっと肩身の狭い思いをしてきたんだろうなぁ…）
里沙の頭には幸男の置かれていた境遇が浮かび心苦しかったが、目の前の彼が見せている笑顔によってその気持ちはすぐに薄れていった。
「会社は今年からなの？」
「うん」
「じゃあ私と同じだね。こっちで仕事に就いたのは、えっと…やっぱり戻ってきたかったから？」

「そう…だね。試験と研修を本社で受けた後は、どこの支社へ行くのかをある程度自由に選ぶことができるんだけど、その選択肢に偶然この県も含まれてて…。ちょっと迷ったんだけどね」
迷うのも無理は無い。ここには彼にとって良い思い出と、悪い悲しい出の両方が存在しているのだから。
「田山さんに会えて本当に良かったよ。鍵もたまには落としてみるものだね」
「会えて良かったのはその通りなんだけど、鍵は落とさない方がいいよ…」
「ああ、僕はいいんだ。鍵なんて使ってないし」
「は？」
何を言ってるんだこの男は。里沙はすぐにどういうことなのかを尋ねた。
「お金に困っている人がいつでも入れるよう、アパートの鍵は閉めてないんだ。もちろん窓もフルオープンだよ。無用心に越したことはないからね」
「ちょっと…何言ってるの幸男君…」
「でね、部屋に入るとお札が道標になってて、それを拾いかながら進むと通帳、キャッシュカード、暗証番号が書かれたメモが置いてあって、さらには我が一族に代々伝わる財宝の地図が…」
「ストーップ！」
「あ、ごめん…僕ばっか喋っちゃって……」
里沙は溜息をついた。
「そうじゃなくて、おかしいでしょ？　そんなことしてたら幸男君が困ることになっちゃうじゃない」
「う～ん、でも常に人のために何かしてないと、それこそ不安で辛いんだよ」
「いや、だからって…」
その時だった。数十メートル先の竹林から「助けて！」と少年の叫び声が聞こえてきた。

「り、里沙ちゃん、行こう…！」
そう言って竹林へ走り出す幸男。
里沙は僅かに出遅れた。少年の声と、久々に聞いた幸男の「里沙ちゃん」という呼び方に一驚したためだ。

恐る恐る竹林の中へ足を踏み入れる里沙。林立する竹の間を縫って進むと、不精髭の男ともみ合っている幸男とそれを怯えた表情で見つめているランドセルを背負った少年の姿が目に入った。
「だ、大丈夫？」
少年の元に駆け寄る里沙。
「あ、あの…髭の男の人に…変なことされそうになって…うぅ…」
「うん、もう大丈夫、大丈夫だから…」
里沙は少年を優しく抱き寄せ、警察を呼ぶために携帯電話を取り出した。
だがその時、
「ま、待って里沙ちゃん…！」
髭の男を押さえ込みながら幸男がそう言った。
「違うんだ、僕は別にこの人を警察に突き出そうだなんて考えていない」
「ど、どうして！？　そんな人野放しにはできないでしょ！」
「大丈夫、僕が満足させるから…！」
幸男はパンツごとズボンを下ろすと、髭の男に尻を突き出した。
「さあ、僕の穴を使ってください！　さあ！！　さあ！！！」
「ウワァァァ！！　何なんだテメェは！！」
逃げ出す髭の男。「遠慮なさらず！」とバックで追いかける幸男。
二人の妙なやり取りは「テメェ、警察呼ぶぞ！！」という髭の男の一声で終息した。

髭の男は逃げて行った。助けた少年も幸男の奇行に恐怖したためか、いつの間にかいなくなっていた。
「何考えてるのよ幸男君！！」
「えっ…？」
不思議そうな顔をする幸男に里沙はますます腹が立った。
「何で幸男君があんな奴に…その…あれよ！　お尻を差し出さなきゃいけないの！？」
その質問を受けた幸男はしばらく沈黙した後、
「…僕には、こういう生き方しかできないんだ」
と呟いた。
「それって…」
里沙はさらに質問を続けようとしたが、幸男の口がまた動き出したので黙って耳を傾けた。
「人に尽くし、幸せを感じてもらう。そうすることでしか僕の存在は認められない。そうすることでしか僕は幸福感を得られないんだ…」
「そ、そんなこと…」
言葉に詰まる里沙。
幸男がこのような偏った考え方をするようになってしまった原因は、十中八九置かれてきた環境にある。突然両親を失い、親戚の家で暮らすことになったのだ。もしかしたらぞんざいに扱われたのかもしれない、たらい回しにされたとも考えられる。
それでも彼は愛という見返りを求め、周りへの気遣いに神経を擦り減らしてきたのだろう。
里沙にその苦しみの全てを想像することは難しい。だがこれまでの行動から、彼が今破滅の道を進んでいることは明らかだった。
「そういえば里沙ちゃん、昔借金があるって言ってたよね？」
不意にそんな話を持ち出す幸男。里沙は唖然とした。

「えっ…やだ、そんなこと覚えてたんだ…」
「返済は？」
「あ、あと…少しかな…」
嫌な予感。里沙の顔が強張る。
「じゃあ僕が残りを払うよ」
「やっぱり…！」
大胆に肩を落とす里沙。
「幸男君がそんなことする必要はないでしょ。だいたいそんなお金あるの？」
「里沙ちゃん」
幸男は両手の親指を自分の左右の腰に当てた。
「腎臓は、二つあるんだよ！」
里沙の口から「ちょちょちょちょちょ…！！」という声が漏れた。
「何馬鹿なこと言ってるの！！」
「いや、僕は本気だよ。こんなこともあろうかと切開する部分にサインペンで点線を引いておいたんだ」
幸男は「判りやすいでしょ？」と言いながら上着をめくった。肌には点線だけでなく“やまおり”“たにおり”“のりしろ”の文字が伺える。付録か何かと勘違いしているらしい。
「幸男君、冷静になって！」
「僕は冷静さ、サインペンはちゃんと油性を選んでる！」
「そうじゃなくて！！」
「止めないでくれ里沙ちゃん。全ては君のため…」
「つぇぇぇぇい！！」
里沙の拳が幸男の頬にめり込んだ。
「グブゥ…！」
尻餅をつく幸男。怯えた表情で里沙を見上げる。
「り、里沙ちゃん？」
荒い息を吐きながら、ゆっくりと幸男に接近する里沙。また殴られると思ったのだろう、幸男は固く目を閉じる。

だが里沙にはもうそんな気は無かった。
「あなたみたいな人は…、誰のことも幸せになんてできない」
言いながら、幸男の体を優しく抱きしめる。
「目の前の人を傷つけてることにも気付いてないんだもん」
幸男の身体が震えているのを里沙は感じた。彼は泣いているようだった。
「じゃあ里沙ちゃん…僕は…どうしたらいいの…？」
「決まってるじゃない…。誰よりもまず、自分を大切にして」
「それで…いいの？」
里沙は幸男の体から離れ、顔を向かい合わせた。
「ええ、そうすればみんなを幸せにできるわ。もちろん、幸男君自身もね」
「里沙…ちゃん…」
その場に崩れ落ち、幸男は泣いた。ただひたすら泣き続けた。

駅前で佇む里沙と幸男。
「もう完全に遅刻だ…。幸男君は？」
腕時計から目を離し、里沙は幸男に問い掛けた。
「僕もたぶん間に合わない…。ごめん、僕のせいだよね…」
「謝らなくてもいいよ。それよりさ…」
体を左に反転させ、二十メートル程先に見えるカフェを指差す里沙。
「新しくできたお店なの。行ってみない？　幸男君とはもっと色々話がしたいし」
「えっ…、でも仕事が……」
一瞬の沈黙の後、幸男の口から意外な言葉が飛び出した。
「ま、いっか。僕も里沙ちゃんと話がしたい」
「幸男君…。じゃあ決まりだね！」

肩を並べてカフェへと歩き出す二人。
里沙がふと横に目を遣ると、そこには幸男の懐かしいあの笑顔があった。

「おかえり、幸男君」

（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6888o/

幸男君

2011年10月3日19時56分発行